

【住民の避難】

東伊佐（アガリイサ）ガマの日本軍

T・C

昭和二十年三月下旬、自宅近くの自然壕に家族十名閉じこもっていた。ところが戦争が激しくなると真栄原の東伊佐ガマに逃げ込んだ。そこには、日本軍の球部隊や石部隊、それに通信兵などに混じって、大謝名や宇地泊あたりの墓地にとじこもった人達が逃げ込んできて二〇〇〇名位にふくれあがっていた。

四月一日、米軍が北谷方面から上陸し、日を追うて普天間、宜野湾、佐真下というふうには潮が満つように押し寄せて来るのが、日本軍の通信隊の情報によって明らかであった。

日本軍は最も近くまで米軍が進撃した頃、一斉に出ていくことになった。その時、民間人も日本軍が南下することを見て島尻方面に下った人達も多かった。ところが私は、自分独りの身ならともかく、家族十名を抱えておりましたので、どうすることもできず、「死ぬならどこでも同じ」という気持ちで残ることにした。私の母は他の人達が逃げ去るのを見て泣きわめいてた。そこで残った十四、五世帯は、三百メートル程奥にしのみ込み、ローソク十四、五本を灯して過ごすことにしたが、ローソクの煙か、それとも酸素の欠乏が目が痛く、咳こみ、もと居た入口近くで過ごすことにした。

それから幾日か経った日、負傷兵を含めて十四、五名の日本軍が明け方に入り込んできた。

米軍は昼は二、三百名近くも壕の周辺まで来ては、夜になると斬り込みを恐れてか引き揚げるようであった。毎日、そのくり返しが続いた。日本軍は壕の入口に擬装した歩哨兵をいつも立てていたので、私が抗議した。「君達が壕の前に歩哨兵を立てると、米軍に見つかり、

銃をぶっぱなすなら、壕の中で軍民とも一滅するからやめなさい。」と言ったら「それは隊長に聞け」と言われたので隊長に交渉することにしてやめてもらうことができたが、その代わり私が歩哨を続けなければならなくなった。

日本軍はかなり食にも飢えているらしく、「腹がへっているからなんとかしてくれ」と頼みこむので、こちらも食糧には窮めていたが各世帯から米一合ずつ集めて雑炊米を作ってあげた。

このまま日本軍と一緒に住んでいると、我々民間人までもが巻き込まれそうであったので、日本軍に「皆さんはこのままそこに居ると危険だから出てもらうように」とすすめたら、昼も出ることはできず、夜も照明弾が激しく撃ち上げられ、どうすることもできず、とうとう一昼夜いることになった。

私はどうすれば日本軍が出て行くかを考えておりましたので、道順などを教えて出すことにした。その中の重傷兵二人程いましたので奥の方にとじこめ、その兵隊の武器は私が預かってゴザの下に隠してあった。

我々の壕に兵隊くずれの伊江島出身の青年がとび込んで来て同居することになった。あまりにも食糧を食いつぶしたので、私が「君はひとの食糧だけをくいつぶして、自分も食糧をさがしてこい」と怒鳴ったので、彼は弾の激しく降る中を甘藷掘りに行った。ところが帰る途中に弾に足をやられてたおれてしまった。私は責任を感じてその青年を担ぎ込み、壕に走って来ると後方から赤十字のマークをつけた米軍に追われ、立止ると青年の足の怪我を手当してくれた。私はそれを見て、「米軍は殺しはしないのだ」ということを知り、壕の中の住民の怪我人も診てもらうことにした。

そのとき嘉数高台周辺の戦状はおそろしいものであった。日本軍と米軍は前進したり後退したりしていて幾日続いたかわからないほどである。我々が住んでいる壕の前でも米軍は相当屍れていた。銃後は衛生兵が担架で負傷兵を何十回と運び込むのが見えた。嘉数山は、

約二十四、五日間、炸裂に煙っていた。おそらく、島尻と比較して、坪あたりの弾降量は、はるかに嘉数山が多いのではないかと思う。山の草木一本もなく、白い石肌がむき出しになっていた。

米軍は何回も壕の前まで来るが、そこに住んでいるのが民間人と知ってか、どうもしなかった。むしろ私には煙草を吸わしたりした。壕の中はほとんど老幼婦女子で、部落の若い者は三、四名しかおりませんでしたので、二、三名揃って戦況を観戦したこともあった。米軍は大謝名や牧港方面から上がって来るつもりであるが、嘉数方面の高地から何回も打ち斃されて、どうすることもできず、後には海の方から廻ってきたようだった。

私は石部隊に知り合いがいたので、夜になると様子を見に彼らは廻って来た。もし万一の場合に備えて手榴弾を数個くれてあった。私もどうしようもない時はこれをぶっぱなして諸共に死ぬ積りであった。しかし、実際に最後まで使わず、捕虜になるとき、壕の奥の水溜りに棄ててきた。

捕虜になるとき、奥にとじこもっていた負傷兵に「君も着物を替えて我々と一緒に出た方がよくないか」と勧めたが、「私は覚悟は決めている」と応えていたが、後で見ると自決していた。

我々は首里以南に戦争がまだ続いている頃、米兵が朝七時頃、壕に訪ねて来て、全員出るように命令された。あまりに急だったので、私は皆腹をすかしているから朝食の時間の余裕をおいてくれと頼むと、十時頃迎えに来ることになった。その間、我々は食事を済まし、弁当をつめ、荷物を整えて米軍が来るのを待った。十時ならぬうちに米兵に誘われ、大謝名の闘牛場に連れて行かれた。東伊佐ガマを昇ると、米軍は既に占領と同時に兵舎構築の準備にかかっていた。真栄原の西側一帯は米兵が半裸になって、二、三百名、ブルドーザーや重機を持ちこみ敷きならし、兵舎作りの労働をやっていた。避難民はただ啞然として目をみはるばかりだった。

話のもとにもどるようであるが、我々がこの東伊佐ガマに入っ

らは、絶えず避難民の出入りがあり、都落の者だけとは限らなかつた。そのため、大謝名の闘牛場に集められたときは、相当数の人間になっていた。

捕虜後の生活

米軍は、我々の荷物はトラックで運ぶからと言って、着のみ着のままでトラックに乗せた。私と三名の若者は、日本軍と間違つたのか家族と引き離され、ジープに乗せられた。

避難民の家族たちは北谷の海岸の真砂の上に一晚放置された。私は米軍のキャンプに連行され、いろいろと訊問を受けた。お前たちはいつ兵隊から逃げたのか、軍人だろう、などと問われた。私は支那事変に参加して兵役中に結核にかかり、そのため、沖縄戦の場合は防衛隊を免れておりましたので、軍人としては日本軍と間違つたと思う。

それで、うそをついたら家族ともどもに死刑にするとか言っていた。また、嘘をつくと宜野湾村の兵事係は捕虜になつて生きているので、その人から調べるなどと言つて四、五時間調査された。その後、北谷の海岸にいる家族のもとに戻された。

その時、我々は、波打ちぎわに一泊させられ、次はアメリカの船に乗せられ、海の奥深く捨てられると思つていた。

しかし、翌日は、北谷の謝苅の空家に移され、そこで一週間ほどして、具志川村の前原に移された。

私は前原に移される時、馬車馬をさがしていたので、前原へ行つてからも、夜は首里方面まで食糧さがしに出た。浦添から首里当りにかけて死体がごろごろしていた。私の弟(三男)がその辺の務めだったので、日本軍の死体を見るたびに一通り顔を見ないと気が済まなかつた。浦添には壕の中に米俵があつたので、それを運んできたことは再三あつた。その当時からは普天間飛行場は既に出来上がつて、夜道を馬車を通すのに滑走路で迷いこんでM・Pに連れ出されたこともあつ

た。その時、私は腹がへっっているものでどうしようもないと、手まねで言うと、一通りかえしてからジープで後を追って来て缶詰めを箱ごとくれたこともあった。

具志川の生活も厳しいものでした。島尻方面から運ばれて来る避難民を担架でテントの中に運ぶ仕事でしたが、シラミがウジャウジャしているし、その上風呂を入ってないので臭くて近寄ることもできなかつた。中には、怪我人は蛆虫も湧いて悪臭を放っていた。

そのときまでは、民間人の通行許可証は出てなかったが、私はあちこち歩きまわった。ある日、胡差に親戚の者を訪ねるために行くことになった。近くの女性二人が「自分たちも用事があるから同伴させてくれ」とたのまれたので、一緒に行くことになった。ところが、途中で黒人兵二人に遭い、女性が襲われるのを救うために、格闘した。その時、黒人の一人は拳銃を持っており、一人は短刀を持っていた。半ばあきらめていたが、命がけで格闘し、黒人が拳銃を向けたので、その腕をとって自分の脇に強くはさんだら、黒人は腕をはさまれたまま、拳銃を撃ち続けたので、弾がなくなつた頃をみはからって救い出した。その時、近くにいた沖縄人労務員たちが駆けつけ、捕り逃がした。しかし、黒人が向けた拳銃の方向にいた労務員の一人が撃たれて怪我をしたことがある。

戦争の恐ろしさは、ほんとは語りたくないのが心境である。

出典：『宜野湾市民が綴る戦争体験 戦禍と飢え』

宜野湾がじゅまる会 (1979)